

日本を走った

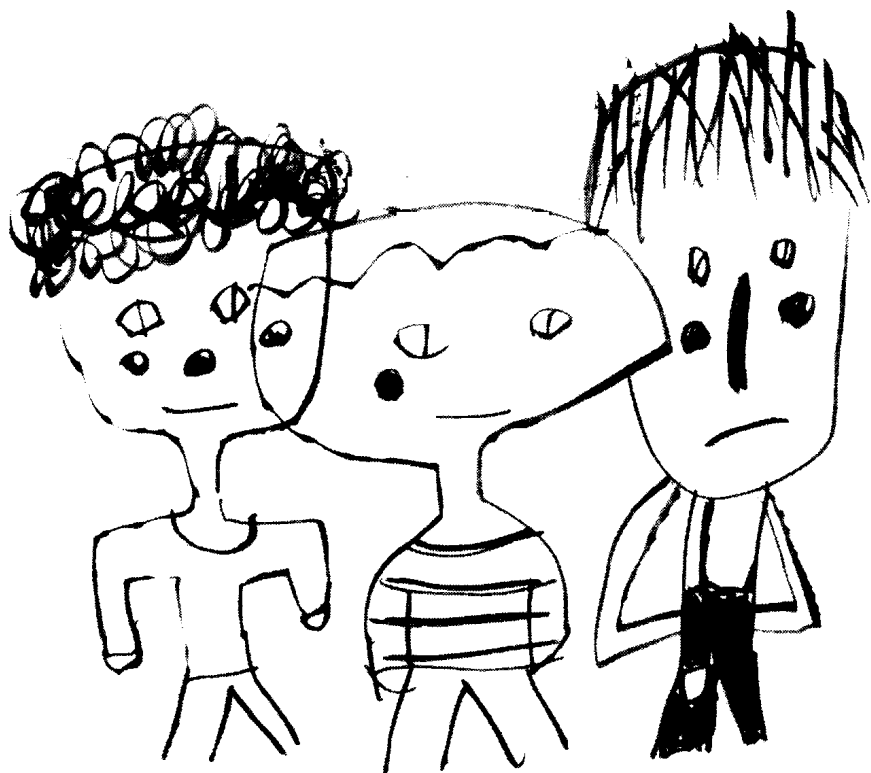
村上早人

少年たち



口平を走った少年たち

村上早人



日本を走った少年たち

1985年7月30日 初版第1刷発行

著 者 村上早人

発行所 法令総合出版K.K.

東京都港区赤坂1の9の15 日本自転車会館2号館7F
電話03(584)9821／振替・東京6-143929

印刷・製本所 ヨシダ印刷K.K.

ISBN4-89346-034

乱丁・落丁本はお取替えいたします。〈検印廃止〉

© Hayato Murakami 1985 Printed in Japan

日本を走った少年たち

装幀・挿画
河原まり子

はしがき

昭和二十年八月十五日を境に戦後は日一日と遠くに去って行く。

あの敗戦の廃墟と化したどん底で、齒を食いしばって苦しんで生きた日本人が、戦後四十年、日本人のもつ勤勉さとバイタリティーで日本を一躍、世界の檣舞台にのせ、見事再建した。そして、ある人は言う。

「四十年前、あの第二次世界大戦で完全に負けたが、今、日本は、世界との企業競争に於いて完全に世界を征服、勝利を得た」

私は、こういうものの考えをもった人が現在たくさんいる事を知っている。しかし、殊に、あの苦しい戦後を生きた人々の口から、この言葉を聞く事は悲しい事である。あの忌むべき戦争で何百万人という死んで行った人々の事や、親も住む家も失くして苦しみの中で生きた戦争孤児の事など忘れてしまったのだろうか。また、中国に残された孤児や、戦争花嫁となって外国に渡り、泣いて暮した日本女性の事や、原爆による白血病で今も苦しんで生きる被爆者の事など、遠い昔の語り草になってしまったのだろうか。

戦後四十年を今一人静かに振り返る時、よく生きてこられたという自己の満足と喜びを深く感ぜずにはいられない。と同時に、死んで行った戦災孤児仲間達の事やお世話になった人々の

事を、そして、皆があゝの頃一緒に、あの苦しい日々を生きていたという立派な生ある証拠を、彼女らに代つてこの世に書き残すことが、生き残つた者のせめてものつとめでないかと思う。私は人生の半分以上をアメリカで暮した為に、現在の本当の日本人のありの姿を知らないし、又、現在の日本の若者達の戦争に関する心情など知る由もない。

戦後の若者達が果たして我々世代の者達をどんな形で見ているのか、私は知つてみたい。そして、もし、美津子姉さんや和子や亡くなつた友達が、現在の若者達の前に突然現われたら、同じ日本人として、どう対処し、その状況を処理するだろうか。

そんな折、戦後の混乱をまったく知らずに育つた、日本から来た津坂裕子という若い女性と知り合つた。この女性に私の書いた日誌を託しシスコへ向かつた。

現在の若者が戦後体験をどうとらえるか、この女性によつて知つてみようという私の強い好奇心からであつた。そしてサンフランシスコにいた私の手元にこの女性から長い長い手紙が一通届いた。

「……美津子さんの事をいつも、いつも考えているうちに、遂ぞ、私の心にも住みついてしまつたようです。『何も思わず、何も考えず、唯ペン先だけをみつめよ』 現在の村上さんの文字を見て、誰が小学校へも行けなかつた人だと想像できるでしょうか。

彼女は神に祈つていたと言うけれど、私はハヤトと一緒に彼女に祈りたい気持ちです。今の私、当時の彼女と同じくらいの歳です。恋愛もせず、結婚もせず、短い命を賭けて彼女がなし

た事が、そして人そのものが、人の心の中に生き続けるという事を初めて知りました。

また、和子さんが、来る日も、来る日も一心に手紙を書きながら祈り続けたのは、やはり美津子さんと同じ様にハヤトの幸せだったのでしょね。限られた命の中、神に祈る事が彼女に出来る唯一つの愛だったなんて……。

これは、四十年前の過去帳、戦争の傷跡と思うよりも、私は『汚れ無き天使達』の青春だと思いたい。私の生きた現在にはない何かが、ここにはあります。

戦争の事など何も知らない私。しかし、戦後日本中の人々がとても大変だったという事、村上さんの日記帳の中で彼女達に会えた事、本当によかったと思います。……」

私は、世代を超えて生きること、愛することを理解し、共感してくれる人がいることに喜びを感じる。

遠い遠い子供の時代、愛する美津子姉さんや、仲良しの友の死を悔み、すべての辛さ、悲しみから逃げようと卑怯な少年になって、自由と平等の国、アメリカを夢見て渡米し、思えば色々の仕事をやった。そして全米のいたる所で生活をし、様々の人と出会った。

私の人生で、私は唯一つ誇りをもって言える事がある。それは出会ったすべての人が皆素晴らしい人々であったという事である。私の様な、何処の馬の骨とも分からぬ一介の浮浪児を、皆とても大事にして可愛がり、育て、くれた。今とても感謝している。

あの日、お世話になった美津姉ちゃんの祈りが、仲良しの友の涙が、愛する和子の祈りの手

紙が、長い私の人生を守ってくれているのだろうか。それならば、私は遠く天国にいる彼、彼女達にひとこと、

「長い間、俺を守ってくれて本当にありがとう。俺は立派な大人となって、今、元気に生きています。俺の事はもう心配しないでいいんだから、安らかに休んで下さい」と、そう言つて冥福を祈らずにはおれない。

私は、五才の頃、戦災孤児となつたため、正規の学校に行けなかつた。そのため文は拙いかもしれないが幼少の頃から青春のころまでの、私の見た事、あつた事、そして心のありのままを紙面にぶつつけて日誌に書いたつもりである。そして、この本は、その日誌の一部である。

戦後四十年。もう戦後ではないが、この本『日本を走つた少年たち』を読んで下さつた心ある人達の口から、唯一言、「もう戦争は嫌だネー」と言つて下さつたら幸いである。

なお、法令総合出版の久保田静男社長、同社編集部藤勇三氏の暖い御厚意によってこの本が日の目を見る事が出来ました事を心から感謝致しております。

また、この本は、田中保氏御夫婦、井之上喬氏の厚い友情の所産であり、その御尽力なくして、到底出版出来なかつたもので、今は亡き石渡美津子や倉石和子、亡くなつた浮浪児仲間 に代つて心より厚く御礼申し上げます。

一九八五年夏、ロスにて

村上早人

もくじ

はしがき 3

第1章 母を呼ぶ声 9

第2章 美津子への歌 49

出会い

51

美津子は涙を見せない

61

美津子の怒り

71

第3章

白百合の花 87
悲しき唄 97

わが心の友

.....
125

身分証明 127

山手線の六羽ガラス 133

旅の途中で 150

ハヤブサ 178

第4章

神に祈る女

.....
191

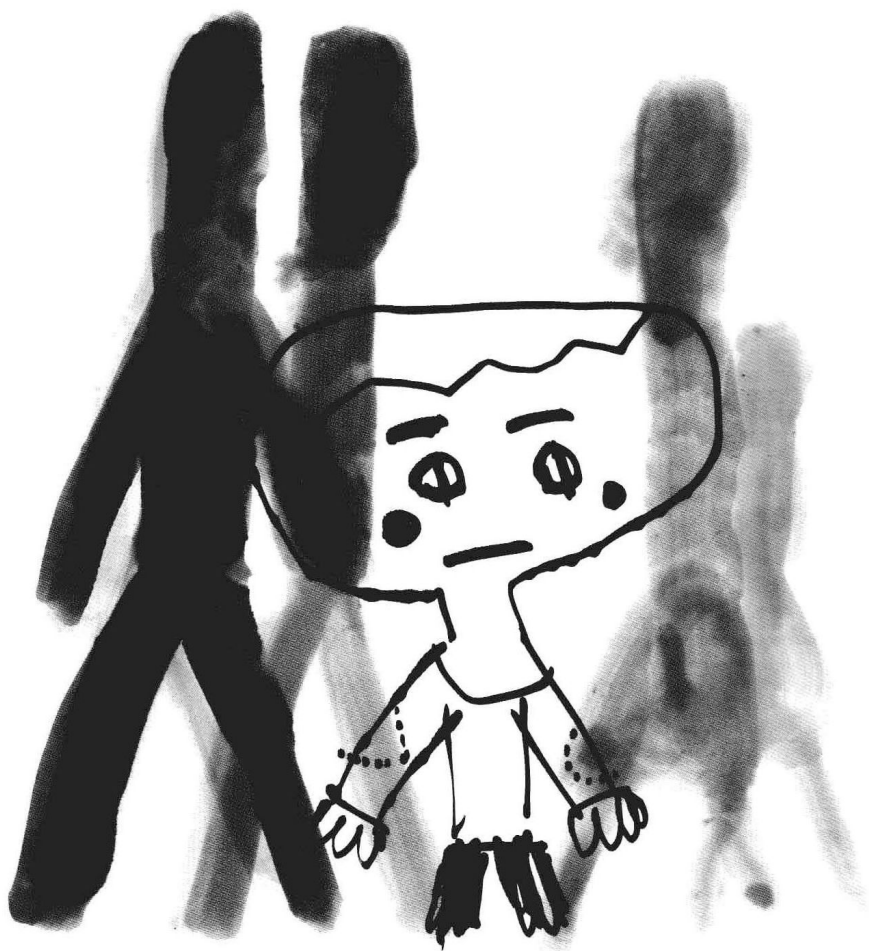
私“神の子よ” 193

和子からの手紙 201

命の灯 218

第1章

母を呼ぶ声



警視庁及び警察署の書類に、

本名 村上早人（通称ハヤト）。

生年月日 昭和十五年二月二十五日。

本籍地 東京都台東区浅草、以下戦災にて不詳。

現住所 不詳。

父 不詳。

母 戦災にて死別。

親戚 不詳。

学歴 なし。

身元保証人 なし。

刑罰 浮浪児狩りにて静岡少年施設、又は窃盗傷害にて多摩感化院入所。

尚、危険少年につき、くれぐれも要注意。

性質狂暴、逃亡の恐れあり。嚴重なる処置を要す。

と、赤エンピツで書かれてあるが、私自身確かな生年月日も、住所も分らない。

私、ハヤトが物心ついたのは、確か四、五歳の頃であったと思う。当時、毎日が空襲警報の

サイレンと防空壕への避難訓練の明け暮れであった。

その日が、何年何月何日の空襲であったのか定かではない。私は当日、母にかゝえられたり、手を引かれたりしながらB 29から落とされる爆弾の雨の中を、火の海とけむりの中を一生懸命安全地帯へと逃げていた。

右も、左も、道さえも分からないほどの火とけむりであった。人の叫び声、落ちて来る爆弾の音、大きく音を立て、破裂する爆弾、燃えくずれる建物の音。

防空頭巾をかぶった私の体に火の粉は容赦なく落ちて、はらつても、はらつても火が付いた。「あついヨ」って、母に助けを呼ぶ声を出せないほど、落ちて来る爆弾から逃げるのに必死であった。私の母は、その時に爆弾で飛ばされて死んだ。

火と煙の中で一人立ちすくむ事数分、逃げて通りかゝった大人の人に抱えられ、私は火の海と爆弾の中から生きて無事脱出する事が出来た。そして終戦までの数か月、私は見ず知らずの大勢の人達と一緒に防空壕で生活をした。

防空壕に生活をする人々は、とても親切だった。自分達の食べ物を皆少しづつ私に与え食べさせてくれた。

外は絶望的光景であった。見渡すばかりの焼野が原。こゝにもあそこにも黒こげとなつた焼死体が転がっていた。そして異様な臭いが焼け跡の中に漂っていた。

「恐ろしい花火」

二年生 野村しず子

夜空にしょういだんの花火が長く尾を引いて見えます。

アメリカのB 29から落ちて来る花火はともこわい花火です。

私の家も、おとなりの家も、みんな、もやしてしまいました。

私の仲良しのお友達も近所のおばさんも、しょういだんでみんな死にました。

アメリカの花火は、とてもこわい花火です。

日本が戦争に負けてもいいから、早く戦争が終つてくれたらいいのと言ったら、お母さんにすごく叱られました。

でも、私は、こんなに恐ろしい戦争なら早くやめてくれればいいと本当に思っています。

これは当時、ある雑誌に載っていた少女の作文である。

昭和二十年八月十五日、日本は終戦の日であった。私はこの日、人からもらったにぎりめしを食べながら終戦の日を迎えた。誰もが緊張して、ボロ、ボロのラジオから放送される天皇陛下の声に泣き、項垂^{うなだ}れていた。

自分にとって終戦という安堵の実感は分からなかったが、今日からB 29が飛んで来て爆弾は

もう落とされないから、逃げ廻らなくてもいいんだナーという事は子供なりに分かった。私は、あの終戦の日に人からもった焼にぎりめしを一人食べながら、皆の泣いている姿を見つめていた。あの日のあの白米の焼にぎりは、とてもうまかった。

それが私の終戦の日の遠い日の思い出だ。終戦直後の私は何処をどう歩いて生きたのだろうか。はつきりとした記憶がない。

防空壕と一緒に生活をしていた人々は、終戦になると、一人、二人と去って行った。私は泣きながら誰かの家族の後からついて行ったり、人に拾われて食べさせてもらい、その人に捨てられて、又誰かに助けられる。そんな繰り返しだった様な薄い記憶がある。

暫くの間、私は人に話しかけられても、どんなに親切にされ、食べ物をもらっても、一口もものを言わない無口の子であった。

B 29の大きな音、落とされるたくさんの爆弾、燃えてくずれていく家、泣き叫ぶ人々、死体の山又山、目の前で死んでいった母……。

幼年の自分には、あまりにも残酷な光景と出来事であった。ボヤーツとしたショックの日が、何日も何か月も続いた。

死んだ母が恋しく、防空壕のすみっこで母の事ばかり思って一人「お母さん、お母さん」って小声で呼びながら毎日泣いていた記憶がある……。

そして、美津子姉さんから字を教わり、文が書ける様になってから数えきれないほど母の作